三/年/目

山本哲也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
三／年／目

【Ｎコード】
Ｎ３１３７Ｈ

【作者名】
山本哲也

【あらすじ】
高校三年生の藤代匠は悪友の小川弘樹にそそのかされ、三年間ずっと想いを寄せている女友達の渡瀬瑞貴に気持ちを打ち明けるべく花火大会に誘うことにする。だがその会場で妹の藤代千夏に出くわしてしまい、告白大作戦はグダグダに…。果たして匠は告白できるか！？

はじまり

ミーンミンミンミーン…。

うるさいくらいに鳴いている蝉が、暑さを演出している。窓から見上げると、木々の切れ間から漏れてくる午後の日差しが目に痛い。開けっ放しの窓から入ってくるのは蝉の鳴き声ばかりで、風はそよとも入っては来ない。むしむしと熱気の支配する教室では皆、死んだようにぐたっとなっていた。顔を上げて黒板を見ているものなど数えるほどで、この部屋の中に充満している熱気が、生徒たちの熱意の現れでないのは確実だ。

暑い。とにかく暑い。

今年の夏は近年にないほどの猛暑だということで、連日の気温は三十度を超えていた。

（こんな事なら夏期講習なんかやめとくんだった…）

半ば朦朧とした頭で、黒板の前で初老の先生が何かを講義しているのをぼんやりと聞きながら、藤代匠はそう思った。高校三年の夏休みだから何かしなければ、と言う甚だいい加減な理由から、学校で行われている夏期講習に申し込んだのだが、こんな事ならまだ家で勉強していた方がましだったのでは、と思えてくる。

匠は今が何の授業だかもよく分からなくなっていた。焦点の定まらない目が黒板の方へ向けられてはいたが、それだけだった。左手が半ば機械的に下敷きで扇いではいるが、ただ熱風をかき回しているだけにすぎなくなっている。

顎を伝わる汗が、ぽとりとノートに落ちる。

匠は辺りを見回した。

親友の小川弘樹はさっきからずっと船を漕いでいる。匠の右隣の席に目を向けると、渡瀬瑞貴も机に突っ伏して堂々と眠っていた。肩から背中にかけて広がっている長い髪が、なんだかとても暑そうに見える。瑞貴は、匠の数少ない女友達で、匠とは高校一年の時か

らの付き合いだった。
見回してみても、教室にいる他の女の子たちは何とか起きているか少なくともう少し控えめに居眠りをしている。
（…もう少し遠慮とかいうものがねぇのかよ…）
匠はため息をつき、背もたれに寄りかかる。気休め程度だったが、ほんの少しだけ冷たい背もたれが、気持ちよかった。
キーンコーンカーンコーン
チャイムが鳴る。と、それがまるで最後の審判の天使のラッパであるかのように、それまで机に突っ伏して死人と化していた生徒たちがむくりと一斉に起き出し、立ち上がる。
今日の授業はこれが最後だった。

はじまり（後書き）

どうも。作者の山本です。読んでいただいてありがとうございます。

この小説はまだ携帯電話がそれほど普及する前に書かれました。想い人の家に電話するのに家人が出たらどう言おうか思い悩むシーンなど、ケータイ世代にはピンと来ない事も多々あるとは思いますが、まぁそんな時代もあったんだと当時の苦労をしのんでください（笑）。

悪友

「瑞貴ぃ、おでこん所、赤くなってる」
帰り支度をしていた瑞貴に、匠が自分のおでこを指で差しながら言う。
「え？　うそ、やだなぁ」
鞄に荷物を詰めていた手を止め、瑞貴がおでこに手をやる。
「馬鹿みてーに眠ってるからだろ。暫くすりゃ戻るよ」
おでこに手をやり、ごしごしとしきりにこすっている瑞貴に、苦笑しながら匠が言った。
大体、こすってどうなるというんだ。
そう、匠は思った。

ピークは過ぎたようだが、外はまだうだるような暑さだ。玄関から外に出た匠は額に手をかざし、目を細めた。校庭は陽炎（かげろう）でゆらゆらと揺（ゆ）らめき、午後の日差しで照らされて白っぽい風景はまるで露出オーバーの写真のようだ。相変わらず続いている蝉の鳴き声が暑さに花を添えている。
「あっつー。こういう時は、バッサリとやりたくなるわね、この髪」
そう言いながら瑞貴が長い黒髪をゴムで束ね、ポニーテールにする。あらわになった白いうなじが少しまぶしく、匠は目をそらした。瑞貴は学校に自転車で通学しているのだが、自転車に乗っていると長い髪が邪魔になるのでこうしてまとめるのだ。ずっとまとめていないのは、後ろに引っ張られるような感じがするのがあまり好きではないせいらしい。
「そ、その分冬はいいんだろ。それに、そうしょっちゅう切りに行かなくても済むじゃんか」
匠が照れ隠しにそう言う。
「んー、ま、あたしはそうだけどね、ホントはちゃんと切りに行っ

たりしないといけないみたいだけど。そんなのめんどくさいし」
そう言いながら瑞貴が前髪を掻き上げる。
「長い方がよっぽどめんどくさいんじゃねぇの？」
「…そうかもね。じゃ、思い切って今度切ろっかな」
束ねた髪をつかんで見つめながら、瑞貴が呟く。
「あ、い、いや、俺はそのままでいいと思うけど」
「何よ、切れって言ったの匠じゃない」
ちょっとふくれた表情で、瑞貴が言う。
「お、俺は別にそんな事言ってないぜ」
「何やってんだよ、お二人さん。こんなクソ暑いところで。痴話喧嘩（ちわげんか）かぁ？」
そこへ、弘樹が話に割り込んできた。さっきまでぐたっとなってずっと居眠りをしていたというのに、今はまるで生まれ変わったように生き生きとしている。口では「クソ暑い」などと言っておきながら、暑さなどまるで関係ないかのように元気な笑顔を浮かべていた。匠から見ればうっとうしいばかりの肩まで届く長髪を後ろで止めた弘樹は、身長こそ長身の匠に少し及ばないが、その分すばしっこそうな外見をしており、またその外見を裏切らなかった。その上、同じく高三で夏期講習を受けている身分であるにもかかわらず、弘樹の肌は浅黒く日焼けしている。
一体、どこで遊んでいるのだろうか。いや、そもそもどこにそんな暇があるのだろう。
「何言ってんのよ。それより弘樹君、なんか日焼けしてるみたい。海にでも行ったの？」
同じ疑問を抱いたのか、瑞貴が尋ねる。
「まあね」
「いつ？」
瑞貴が続ける。
「先週」
「先週って…模試…」

そう言いかけた匠を弘樹が遮る。
「さぼりさ。あんなもんどーだっていいんだよ。模試で受かる訳じゃないんだからな」
そう言って弘樹がにやりと笑った。
「…あいかわらずだな」
半ば感心すらして、匠が呟く。匠と弘樹は中学生の頃からの付き合いなのだが、弘樹の遊び癖は昔っからこんな風で、それでも同じ高校に合格してしまうあたり、匠が馬鹿なのか、それとも弘樹が要領がいいのか。当時、匠は喜び半分の複雑な気持ちになったものだ。
「ま、色々と忙しくってね、あんな暇なことはやってられないのさ」
「どうせ女の子と遊んでたんだろ」
多少のやっかみも込めて、匠が言う。
「それも立派な用事さ」
弘樹が肩をすくめて見せた。
「じゃ、あたし、帰るね」
二人が話し出すと、瑞貴がそう言って二人から離れる。
「あ、ああ。気ぃつけて。ぼーっとしてて、壁につっこんだりするなよ」
「だーれが」
からかう匠にそう答えると、瑞貴は自転車置き場の方へ向かった。
「お邪魔だったかな？」
去っていく瑞貴を見送りながら、頭の後ろで両手を組んだ弘樹が呟く。弘樹は瑞貴が二人の話の邪魔にならないように気を使ったのでは、と言いたいのだ。
「何言ってんだよ、全く。…多分、暑いからだろ。あいつって、そういう奴じゃん」
「妙に分かったような言い方だな」
「そりゃ…もう友達付き合い始めて、三年目だし」
匠は心なしか「友達」という所を強調して言う。だが、それは自分でも意識しているわけではなかった。

「へーえ」
弘樹は馬鹿にしたような目で匠の方を見る。
「な、何だよ」
「別に。大したもんだって感心してるのさ。それより、もう、キスぐらいした？」
そう言いながら弘樹が意味ありげににやりと笑う。
「はぁ！？　キ、キスぅ！？」
つい、大声を出してしまう。あわてて辺りを見回すと、そばを通りかかっていた女子生徒たちが興味津々といった様子でこちらをちらちらと見ながら通り過ぎていく。弘樹はそんな女子生徒たちに手を振って、にこやかな笑顔を向けていた。
「お、おい、何言ってんだよ、大体…」
「好きなんだろ」
「そ、そんなんじゃ…」
「好き、だよな」
しどろもどろにごまかそうとする匠を弘樹が大声で遮る。相変わらず、近くを通り過ぎる生徒たちが興味深そうにこちらを見ていくが、弘樹はいっこうに気にする様子もない。どうやら、それを計算に入れてわざと大声を出しているらしい。
「好き、なんだな」
今度は念を押すように、弘樹が尋ねる。
うつむいた匠は耳まで真っ赤になりながらこくりと小さく頷(うなづ)いた。
とたんに弘樹がにんまりと笑う。
「そう来なくっちゃな。で、どうすんだ？」
「ど、どうって？」
「鈍い奴だな、告白するとか、そういうのに決まってんだろ」
呆れたような表情で弘樹が言う。
「ま、まだそんなこと…第一…」
恥ずかしげにうつむいて匠は歩き出す。
「まだって、もう三年目だろ？　お前ら。それで、今まで一度もな

ーんにもなかったわけ？　もう行く所まで行ってたっておかしかないぜ、普通」
「…だって、別に、恋人とかそういうのじゃないから…友達、だから」
「じゃ、お前はそれでいいのかよ？　友達だからって言って、それを言い訳にして、白黒つけることから逃げてるだけじゃないのか？」
「…」
俯（うつむ）いたまま、匠は何も言えなくなっていた。確かに、弘樹の言っていることは当たっていた。怖いのだ。本当は。少なくとも、このままでいれば失わなくて済む。恋人じゃなくても、友達なら、他人よりはいい。いつも、匠はそう思っていた。
「…俺だって、いつかは…その…言うつもりでいたよ」
「告白」という言葉は何となく喉に引っかかり、すんなりとは出てこなかった。
「卒業式の後、体育館の裏に呼び出して、とかいうんだろ？」
驚いた表情で弘樹を見つめ、心の内を見透かされて真っ赤になって何も言えなくなってしまっている匠を見て、呆れた表情でさらに続ける。
「図星、か。…あほか？　まだ八月だぜ？　三月の卒業式まで、一体どれだけの時間があると思ってるんだ？」
「だ、だけど、今年は受験があるんだぜ、そんな時に…」
「甘ーい！　甘い、甘い！　そうやってると、いつの間にか別の男に取られたりするんだぜ。こーいうのはな、勢いで押しまくるんだよ」
弘樹はオーバーに首を振り、それからがしっと匠の両腕をつかむと、そう力説する。
「い、勢い…」
「そー。勢いだ。押せ押せ押せ押せ押しまくれってな。で、さしあたって、だ。日曜に花火大会があるのは知ってるな？」
「あ、ああ…」

「そこに渡瀬を誘って、後はこれから俺が伝授してやる通りに事を運べばバッチリだ。うまくすれば初Cもいただけるかもしれないからな、ちゃーんとアレは…」
「そ、そんなのいらないよ！」
「？　何言ってんだ、アレは男の思いやりだぞ。大体、この年で足枷(かせ)は欲しくないだろう？」
キョトンとした表情で、弘樹が諭(さと)すように言う。
「だから、そんなことはしないっつーの！！」
匠は真っ赤になって我知らず叫んでいた。

行こか戻ろか

その夜。

「…はあ…」

匠は受話器を持ったまま大きくため息をつくと、それを元に戻した。

これでさっきからもう十度目だ。昼間、弘樹に色々と言われたあげく、とうとう瑞貴を日曜日の花火大会に誘うことを約束させられてしまったのだ。

『実力行使あるのみ、だぜ』

別れ際に、ウインクしてそう言った弘樹の顔が目に浮かぶ。

「…大体、どうしてそんなことしなくちゃなんないんだよ…」

電話を恨めしげに見つめ、匠はそう呟く。

それにしても、女の子の所に電話をするのがこんなにも大変なことだとは。

何て話そう、だとか、どう誘ったらいいのか、とか、向こうの親が出たら何か変な風に思われるんじゃないか、とか。

そんなことが次々と頭をよぎり、そのたびにダイヤルの途中で受話器を置いてしまうのだ。

（…やっぱ、止めようかな…）

ほとほと疲れ果ててしまった匠は、受話器を見つめてそんなことすら思う。

ピロロロロ…

その時、ちょうど見つめていた電話が鳴った。半ば反射的に匠が受話器を取ると、聞き慣れた声が聞こえてきた。

瑞貴だ。

「あ、夜分遅く申し訳ありません、藤代さんのお宅でしょうか、私、匠さんの友達の…」

「お、おう。俺だよ。何、どしたの？」

普段は「匠」と呼ばれているのに、「匠さん」などと呼ばれると何かくすぐったいような気分になってくる。それに、普段の話し方からは全く想像できないようなきちんとした態度に、今まで知らなかった意外な側面を見た気がして、昼間、馬鹿にした顔で『へーえ』と言った弘樹が、思っていた事が何となく分かったような気がした。

（にしても、すげえ偶然もあるもんだな…）

何とか平静を装(よそお)ってはいるが心臓はドキドキと早鐘のように打っている。

友達付き合いを始めてから三年目になるのに、お互い、相手に電話をかけたことなどなかったのだ。

「あ、匠？　あのね、今、弘樹君から電話があってね、匠んとこへ電話しろって。何か用があるからって。何なの？」

（…そう言うことか…）

さすがに良く匠の性格を分かっているというか何というか。匠は弘樹の手際の良さに半ば呆れつつも感心してしまう。

「もしもし？　匠？」

受話器の向こうから瑞貴の怪訝(けげん)そうな声が聞こえてくる。

「え？　あ、い、いや、明日、花火大会があるだろ？　それに、行かないかって事なんだ」

ほとんど咄嗟(とっさ)の勢いというやつで、さらっと言ってしまえた。

「花火大会？　いいの？　遊んでて。悲しき受験生でしょ？」

「う、ま、まあ、そうだけど…」

確かに、それを言われると弱い。

（…やっぱな…ま、一応誘うことは誘ったし…）

弘樹に対して言い訳は立つ、などと妙なことを考えていると、

「いいよ、行こ。どこで待ち合わせ？」

と言う瑞貴の返事。

「へ？」

すでにあきらめていた匠は、予期せぬ返事にかえってとまどってしまう。

「いいよって言ったの。どこで待ち合わせる？」
良く聞こえなかったのかと思ったのか、瑞貴が繰り返す。
「いや、聞こえてはいるんだけど。…そうだな…」
「あ、ちょっと待って…」
電話の向こうから何かを探すようながさごそという音が聞こえる。
「…メモ用紙…メモ用紙…っと。はい、どうぞ」
「…六時半に、駅の改札ってのは？」
「ＯＫ。じゃ、その時…ね」
「ああ。遅れんなよ」
「それはこっちの台詞だって」
カチャン。
受話器を置いた匠は、暫く放心したように立ちつくしていた。心臓がまだドキドキいっている。いつもの軽口まで言ったくせに、内心はひどく緊張していたのだ。
「ちょっと、いつまでそこにいるつもり？」
電話のそばでぼーっと突っ立っている匠に、少し離れたところで腕組みをしてこっちを冷たい目で見ている妹の千夏が、いらついたような言葉を投げかける。
「い、いたのか」
一体、いつから見ていたのだろう。匠は決まりの悪さを感じた。
「用が済んだんだったらとっととそこをどいてってば！　ったくもう、あたしだって電話使いたいんだから…」
千夏がついにかんしゃくを起こし、ドスドスと足音荒くこちらにやってくる。千夏が怒鳴る度に肩ぐらいまでの長さのセミロングの髪がさらさらと揺れた。このつやつやで柔らかな髪は千夏の自慢の髪だった。
妹の千夏は現在中学二年生なのだが、小柄で華奢な外見に似合わずかなりきつい性格で、いつの頃からか匠はその尻に敷かれるようになってしまっているのだ。
匠は早々に自分の部屋に退却することにした。

浴衣の彼女（前書き）

毎週水曜日頃更新予定
全８回

浴衣の彼女

そして、翌日。
予定より二十分も早く駅に着いた匠は、ぼんやりと改札から出てくる人の波を眺めていた。
浴衣を着た男女や家族連れ。四、五人のグループなど、皆楽しそうに話しながらぞろぞろと花火大会の会場である公園の方へ向かって歩いていく。中でもとりわけ目立つのが浴衣姿のアベックたちだ。楽しそうにはしゃぎながら、あるいはしっとりと寄り添って、歩いていく。
（…いいなあ…）
ぼんやりとそれを見ているうちに、何となく匠の期待感も高まっていく。
（…あいつも、もっとその気になれば綺麗になると思うんだけど…）
ぼんやりと眺めている浴衣姿の女の子に、瑞貴の姿を重ねる。昨日ちらりと見てしまった瑞貴の白いうなじが思い出され、思わず匠は赤面した。
「なーに鼻の下のばしてんの？」
不意に、間近なところで瑞貴のからかうような声が聞こえ、匠を現実に引き戻した。
「あ！？　え！？　な、何言ってんだ…」
振り返って言い訳をしようとした匠の声が途中で止まる。
瑞貴が浴衣を着ていたのだ。匠は一瞬自分がまだ妄想の中にいるのではないかと疑った。
「な、何よ、そんなにおかしい？」
ぽかんと口を開けたまま見つめている匠に、少し恥ずかしげに頬を紅く染めながら瑞貴がすねたような声で言う。
「あ、いや、まさか、そんな格好でくるなんて思ってなかったから…」

いつもの軽口も忘れ、かすれたような声でそう答えるのがやっとだった。
「だって、どうせなら気分出したいじゃない？　あたし、花火見に行くのって初めてなんだ」
少し照れたように、わざとはしゃいだ声で瑞貴がそう答え、はにかんだ笑みを浮かべる。
「悲しき受験生はどうしたんだよ」
「んー、ま、いいじゃん。たまには息抜きも、ね」
そう言って瑞貴はウインクして見せた。
「調子いい奴」
匠は内心の嬉しさを隠すように、精一杯、呆(あき)れたような声でそう言ってみせた。

花火大会の会場になっている公園は野球場や陸上競技用のトラックもあるというかなり大きな公園なのだが、それでもたくさんの露店が軒を連ね、数え切れないほどの人々がひしめいている今の有様では少し手狭に思えてくる。
「うーん、なんかひいちゃうなぁ」
人混みを見て圧倒されたのか、瑞貴が呟く。
「…俺も。こんなに、すごいとはね…」
匠も実はあまり人混みは得意ではないのだ。だが、途中ではっと気がついてあわてて付け加える。
「ま、いいじゃん。たまにはこういうのも。い、行こうぜ」
ここまで来て「帰ろう」などと言われたら大変だ。
「わ、ち、ちょっと待ってよ！　ったく、何はしゃいでんだか。大人げないなぁ」
匠はぶつぶつ言う瑞貴の手を取ると、強引に人混みの中に割り込んでいった。
「あ、あれやってもいい？」

瑞貴が綿菓子を食べながら射的の露店を指さす。
「…どーぞ」
半ば呆れ顔の匠が答えるが、既に匠の答えを待たずして瑞貴は射的屋に行ってしまっていた。
匠は今、手に金魚すくいでとった金魚、ヨーヨーすくいでとったヨーヨー、たこ焼き、リンゴアメ、その他訳の分からない品々を持たされ、すっかり荷物持ちにされていた。
（…自分が一番はしゃいでるじゃんか）
楽しげに射的をやっている瑞貴を少し離れたところからぼんやりと眺めながら、匠は思う。
弘樹が「伝授」してくれた計画には、「露店の建ち並ぶ所をぶらぶらと歩きながら、次第にしっとりとした雰囲気になっていく」というのがあったのだが、これではとても「しっとりとした雰囲気」にはなれそうにない。
（…ま、あいつが楽しんでるからいいか…）
考えてみれば、友達として付き合い始めてからもう三度目の夏を迎えているというのに学校以外の場所で会うのはこれが初めてで、こんなにはしゃいでいる瑞貴の姿を見るのもまた、初めてだった。
「おや、こんなところで。奇遇ですなぁ」
いきなり声をかけられて振り返ると、浴衣姿の弘樹がぐいっと体を寄せてきた。少し離れたところに、やはり浴衣姿の女の子がこっちを見て立っている。どうやら、あれが弘樹の今日の相手らしい。匠が学校で見かけたことのある顔ではなく、また、この前弘樹が一緒にいた女の子とも違っている。一体、弘樹には何人の相手がいるのだろう。
「おまえ、何でそんなカッコしてるわけ？」
弘樹がささやくように言う。
「何でって…」
「向こうはちゃんと浴衣着てんじゃねぇかよ。ったく気の利かねぇ…それに、何ぼさっとつっ立ってんだよ、かっこいい所見せるとか、

何とかあるだろ」
　そう言いながら弘樹は射的をやっている瑞貴を目で指し示す。
「だ、だっておまえ、露店を見ながらしっとりとした雰囲気にって、自分で言ったんじゃ…」
「アホか、おめーは。そんなもん臨機応変に対処するに決まってるじゃねぇか！　大体ここで一人で黄昏（たそがれ）てたって…」
　弘樹はそう言いかけて口をつぐんだ。射的を終えた瑞貴が戻って来たのだ。
「あ、弘樹君。弘樹君も来てたんだ」
「よお、珍しいな、こんなとこで。しかも、色っぽい浴衣なんて、さ」
　そう言いながら弘樹が瑞貴を値踏みするように見つめる。瑞貴はその不躾（ぶしつけ）な視線に恥ずかしげに頬を紅く染めた。
「やだなぁ、弘樹君だってそうじゃない。そだ、これから一緒に花火見ない？」
「悪いけど、野暮はなしってことでね。お互いに」
　瑞貴の提案に弘樹は「お互いに」というところをわざと強調するようにそう答えてにやりと笑い、少し離れたところで所在なげにしている女の子を親指で指差した。
「…あ。そ、か、ごめん」
　瑞貴がはっとしたように言う。
「いや、それはお互い様さ。じゃ」
　またも「お互い様」を強調しつつ、弘樹は女の子の所に戻っていく。
「…お互い様、だって」
　人混みに紛れていく弘樹たちを見送りながら、ぼそりと瑞貴が呟いた。匠は瑞貴の後ろ側にいたので、その表情は伺えなかった。
（弘樹の奴、露骨すぎるんだよ！）
　一体、瑞貴はどういう気持ちでそう言ったのだろう。
　どうしよう。ばれたのだろうか。もし、断られたら？

様々な思いが頭をよぎる。
「なんか、勘違いしてるよねー」
急に、振り返った瑞貴が笑いながらあっけらかんと言う。
思わず匠はこけてしまいそうになった。何のことはない、瑞貴は別に弘樹の言った言葉の裏の意味などこれっぽっちも理解していなかったのである。
（…に、鈍いというか…）
匠は気がそがれる思いだった。
（…ま、瑞貴らしいと言えば、瑞貴らしいけど…）
だが、内心少しほっとしていたのもまた、事実だった。
ボン、ボボン。
低い音が、あたりに響く。
花火の開始を知らせる合図だ。
「あーっ！！　もう始まっちゃう！！　行こ、匠！」
「わ！　おい、そんな急に引っ張るなって…」
その音で素っ頓狂な声を上げた瑞貴は、ぼんやりと物思いに耽っていた匠の手を取ると、カンカンと下駄の音をさせながら花火の打ち上げ会場である陸上競技場へと走り出した。

花火

ボーン。

ずしりとお腹に響く音とともに、藍色の夜空に色鮮やかな大輪の華が浮かんでは消える。

思い思いの場所で夜空を見上げる人々は、密やかにささやきあいながら儚(はかな)くも美しい散華(さんげ)を見守っていた。

匠は身近で見る花火がこんなに綺麗なものだとは思っていなかった。匠の家からもこの花火は見えるため、家の窓から缶ビールでも片手に見るのが常だったのだ。

「すごいね。あたし、花火がこんなにお腹に響くものだなんて知らなかった…」

半ば花火の方に心を奪われているらしく、瑞貴が言葉少なにささやく。

「俺も」

匠も小さく呟いた。

しばらくの間、二人は言葉少なに次々とあがっては消える花火を見守っていた。匠の頭の中では、この花火大会に瑞貴を誘った目的もどこかに行ってしまっていた。

コツン。

匠の背中に、何かが当たる。

しかし、花火に見とれている匠は、気にせず花火を見続ける。

コツン。

もう一度。

（…？）

コツン。

そして、もう一度。

さすがにいぶかしく思った匠は瑞貴に気づかれないようにそっと振り返る。もしも、誰かの嫌がらせなどだった時に、なるべく瑞貴

の気分を害したくなかったのだ。
（！？）
匠は、思わず声を上げそうになった。
後ろの、少し離れたところに、弘樹が座っていた。さっき見た女の子も、その隣で弘樹に寄りかかるようにして座っている。弘樹は軽く片手を上げ、ウインクすると、人差し指で瑞貴の方を指差す。それから、自分は側に座っている女の子の肩を抱いてみせる。
瑞貴の肩を抱け、と言っているのだ。
（！！）
匠は顔が火のついたように一気に火照りだしてしまう。心臓の鼓動が急に高鳴りだしていた。
（ど、どうしよう…そんな急に…）
さっきまでは何ともなかったのに、急にそばに座っている瑞貴のことを意識しだしてしまう。頭には血が上り、顔は火照りっぱなしだ。暗くなかったら、顔が真っ赤になっているのがばれてしまっていたことだろう。
そんな匠をからかうかのように、微風が瑞貴の方からふうわりと甘い香りを運んでくる。
（シャンプー？）
匠は瑞貴の横顔をちらりと盗み見る。
瑞貴は相変わらず花火を見つめていた。
その真摯（しんし）な横顔を見つめていると、花火とは全く関係ないことを考えている自分になんだか罪悪感を覚えてしまう。
コツン。
もたもたしている匠に、弘樹がせかすように小石を投げる。
（…わ、分かったよ！）
観念した匠は恐る恐る左手を後ろから瑞貴の肩に伸ばしていく。ちょうど、そのまま行くと抱き寄せるような格好になるのだ。
（…か、肩を抱くくらいなら…いいよな…）
どうせなら冗談っぽくやってしまえばまだ誤魔化すこともできる

だろうに、なぜかそこまでは頭が回らない。
そろり、そろり。
ゆっくりと伸ばしていく手が、ふるえている。
匠にはもう花火の音や周りのざわめきなどは聞こえていなかった。
ただ、うるさいくらいに耳に響いているのは自分の心臓の音だけだ。
そろり、そろり。
もう、匠の左手は瑞貴の肩のすぐ後ろまで来ていた。
あとは、その手を少し前に動かして、肩に手を置くだけだ。
（…頼む…）
祈るような気持ちで、匠は左手を瑞貴の肩に置いた。
「きゃっ！」
とたんに、瑞貴が小さく悲鳴を上げ、びくっと体をふるわせる。
「うわっ！」
その瑞貴の反応に驚いて、匠は手を引っ込めた。
「…な、何だ、匠かぁ。もう、脅かさないでよ」
匠の方を振り返って、瑞貴がむくれる。
「あ、い、いや、む、虫、虫が…いたから…」
あわてて誤魔化す匠。
「ふーん、虫、ねぇ。こんなに暗いのに、よく見えたこと。もしかして、いけない衝動に駆られたんじゃないでしょうね。浴衣姿の、色っぽい美人が隣に座ってるから」
瑞貴がそう言いながらじとっとした目で匠を見る。
「そ、そんなことあるか！　大体、誰が美人だって…」
思わず大声でそう言っていた自分に気がつき、はっとして辺りを見回した匠は周りの冷ややかな視線が自分に向けられていることに気がつき、恥ずかしさで耳まで赤くしながら小さく縮こまる。
「も、もう、冗談なんだから、そんなにムキになんないでよね、恥ずかしい」
「わ、悪ぃ…」

弘樹の方をちらりと見ると、弘樹は声を出さないように苦労しながらお腹を抱えて笑っていた。その隣に座っている女の子も、くすくすとこらえきれずに笑っている。
（あ、あの野郎、俺を最初から馬鹿にするつもりだったのか！？）
ふと、そんな考えが頭をよぎる。
（…く、くっそー、お、俺だって本気になれば…。よ、よーし…）
怒りが匠の闘争心に火をつけたのか、それともばつの悪さを紛らわそうとしてか、急にやる気を出した匠は密かに拳を握りしめ、夜空にそう誓う。
（…でも…）
だが、実際にどうしたらいいのかはさっぱり分からない。そこに考えが及ぶと、燃えさかっていた闘争心も急に水をかけられたように勢いを失ってしまうのだ。
（…どうしよう…）
『行く所まで行ってたってておかしかないぜ、普通』
匠が逡巡（しゅんじゅん）していると、ふと、弘樹の台詞が思い出された。
（…そ、そうだよな…普通なら…）
（…瑞貴だって多少は…気がある…はず…）
そう思いながらちらりと瑞貴の方を見ると、瑞貴は何事もなかったように花火の方を見ている。
（…かな…）
段々と自信が無くなって来るのを匠は感じた。
（…いや、いかん！　こういうのは勢いだって弘樹が言ってたじゃないか！　だから…）
そう、匠は消えかかった情熱を無理矢理燃え上がらせる。
（…告白…すれば…）
しかし、本当に大丈夫なのだろうか。そもそもに於いて、一体誰がどういう状況でその『普通』というのを決めるというのだろう。
（いや！　それじゃただ逃げてるだけだ！）
迷いを振り切るように匠はぎゅっと目をつぶり、そう自分に言い

聞かせた。

『友達』

「すごかったね、花火」
花火大会の後、ぞろぞろと歩く人混みに紛れながら、瑞貴が感動未ださめやらぬ様子で目をきらきらと輝かせながら言う。
「あ、ああ」
匠は気のない返事を返す。
「特に最後の仕掛け花火がねー…って、ちょっと、聞いてんの？」
瑞貴が、ぼんやりしている匠に気づき、訝しげな声を上げる。
「あ？　あ、ああ…で、何だっけ？」
「…ったく、何ぼーっとしてんの？」
「い、いや、何でも…」
そう言いながら、匠はいつ、何処で言おうか、などと言うことを考えていた。
「ちょっと、匠！？」
立ち止まった瑞貴にも気づかないまま、ふらふらと歩いていこうとする匠の腕を瑞貴がつかんで止める。
「どうしたのよ、匠。さっきの事、怒ってんの？　言いたいことあるなら、はっきり言いなよ！」
瑞貴はしっかりと匠の目を見据え、きっぱりとそう言い放つ。その澄んだ瞳が、匠にはつらかった。
「べ、別に…」
匠は、耐えられなくなって目をそらしてしまう。
「匠、あたしたち、友達じゃない。気に障(さわ)ったんなら、謝るから」
「…ち、違うよ…」
「友達」という言葉が、胸に痛い。
（…どうしてそんな風に『友達』なんて言えるんだよ…おまえ、俺のこと何とも思ってないのか？　やっぱ、そうなのか…？）
「じゃあ何？　ねえ、匠、こっちを見てよ！」

瑞貴の寂しそうな目が、匠の心を締め付け、それに耐えきれなくなった匠は目をそらしたまま、ゆっくりと口を開く。
「…お、俺達…もう三年目だし…周りは、色々あっても普通だって言うし…」
だが口をついて出てくる言葉は、匠自身にも意味がよく分からないものだった。
「？」
キョトンとした顔で、瑞貴が匠の方を見る。ふと顔を上げた匠と、その目が合った。
匠は、不意に『自分の気持ちを伝えたい』という欲求が抑えきれないほどにこみ上げてくるのを感じ、気が付いた時にはもう言葉があふれ出していた。
「…お前の事、…好きなんだ！」
言ってしまってから後悔した。しばらくの沈黙が流れる。匠は怖くて瑞貴の顔がまともに見られなかった。
「…な、何だ、そんなこと？　今更、何言ってんのよ。あたしだって、好きだよ」
ややあって、瑞貴がそう答える。
驚いた匠は顔を上げた。瑞貴が、微笑みながらこっちを見ている。だが、その笑顔がどことなくぎこちないもののように思えたのは、匠の気のせいだったのだろうか…。
「だ、だって、好きでもない奴と友達になんかならないでしょ？普通」
どうも、瑞貴の言っている「好き」という言葉の意味が、匠のそれとは少し違っているようだ。
「えっと、あの…」
一体、なんと言うべきか。匠がまごついていると、少し離れたところで浴衣姿の千夏が泣きべそ顔で歩いているのが目に入った。
「千夏！？」
「お、お兄ちゃん！？」

匠に気づいた千夏は、泣きべそ顔のままだーっと走り寄ると、匠にすがってしくしくと泣き出した。

『友達』（後書き）

第６話（全８話）
ＨＰ
ｈｔｔｐ：／／ｓｅｑ．ｉｆ．ｔｖ／

千夏

「ふうん、で、怒った千夏ちゃんは、相手をほっぽっといて一人で帰って来ちゃったんだ？」

公園の、まだざわついている辺りからは少し離れた一角にあるベンチに座って、瑞貴は千夏の話を聞いていた。匠は今、近くのコンビニまでビールを買いに行っている。何となく女同士の方が話しやすいのでは、と思った瑞貴が、無理矢理買いに行かせたのだ。

千夏の話はこうだった。

付き合っている男の子との仲を、『進展が遅い』などと女友達にからかわれた千夏は、いかにもムードのある花火大会のデートに誘ったのだが、相手の男の子はいつもと変わらぬ調子で千夏の誘いに乗る様子もない。で、意気地のない相手に腹を立てた千夏は相手をほっぽって一人で歩いていたのだが、なんだか悲しくなって泣いていたというのだ。

（…手を出してくれない、ねぇ…）

「ったくもう、博文ったら、一緒に花火見てても肩も抱いてくれないんだもん」

ぶつぶつ文句を言っている千夏を半ば呆れて瑞貴は眺めていた。

（…一体、いくつよこの娘…）

「やれやれ、人使いが荒いぜ」

やがて、そう文句を言いながら匠が帰ってきた。手にはビールの入ったコンビニの袋をぶら下げている。そんな匠の顔を瑞貴はまじまじと見つめた。

「な、何だよ」

見つめられて、匠が訝（いぶか）しげな声を上げる。

「…別にぃー」

そう言いながら、瑞貴は匠の差し出した缶ビールを受け取り、一つを千夏に渡す。

「あ、お、おい、千夏には…」
そう言って止めようとする匠を後目(しりめ)に、千夏はさっさと缶を開けるとぐびぐびとビールを飲み出す。
「何？　二本しか買ってこなかったの？」
ビールを飲む二人を暫く所在なげに見つめた後、仕方なく残っていたジュースを取り出した匠に瑞貴が呆れたような表情で尋(たず)ねる。
「だって、千夏には飲ませるつもりじゃ…」
「うるさいな！　お兄ちゃんは！　ね、瑞貴さん、こんな奴ほっといて飲も！」
さっきは泣きながらすがってきたくせに、と匠は思うが、言うとまたうるさそうなので黙っていた。
「ばっかみたい。何つっ立ってんの？　座ったら？」
ぼんやりと立ちつくしている匠に、既にとろんとした目つきになり始めた千夏がからむ。千夏は酒に弱いくせに飲みたがり、おまけにからみ酒なのだ。匠は言われるままに瑞貴の側の空いている所にちょこんと腰を下ろした。
「…はい」
そんな匠をじろっと見てから、瑞貴が自分の飲んでいた缶を差し出す。
「…いいの？」
戸惑いながらそれを見つめる匠。
「いらないんなら飲んじゃうよ」
そう瑞貴に言われ、匠は缶を受け取った。そして、それをちょっと見つめてからくいっとあおる。
それにつられて千夏も一口あおると、またしゃべり出す。
「ぷうーっ。ったく博文の奴、意気地なしなんだから！　花火見てる時、手ぐらい回すでしょ？　普通」
「ぶっ！」
ビールを飲んでいた匠は思わず吹き出してしまう。
「ごほ！　がは！　ごほ！」

「汚ーい。何やってるのよ」
激しくむせる匠に、千夏が冷ややかな視線を投げつける。
「…もったいないなぁ」
瑞貴もそう呟いた。
「…あ…あの…ごほ！　…なあ…」
苦しげにむせながら匠が何かを言おうとする。だが千夏がまたしゃべりだし、それは無視された。
「ね、聞いてよ瑞貴さん。それでね、あたしが、『どうして何もしてくれないの！』って言ったら、博文の奴、困ったような顔をするだけで何も言わないの…」
そこでまた一口、ビールをあおると、いきなり悲しげな声になって続ける。
「…あたしのこと、嫌いなのかなぁ」
「お、お前なぁ、中学生のくせに…」
「うるさい！　女の子に電話もできないような軟弱者は黙ってろ！」
千夏はそう言いながら立ち上がって匠を蹴る真似をする。
「な…！　お、お前…」
「へえ？　聞かせて聞かせて」
瑞貴が興味津々といった様子で尋ねる。
「それがね、お兄ちゃんったらね…」
「わ！　よ、よせっ！」
いやらしい含み笑いをしながら何かを言いかけた千夏を匠があわてて押さえる。
「いーじゃん匠、聞かせてよ」
「よ、よかねーよ！　…いてーっ！」
匠が瑞貴の方に気を取られている隙に、千夏の口をふさいでいた匠の手に千夏が噛みついた。酔っぱらっていて、行動がめちゃくちゃになっているらしい。
「…いってー、お、お前、いくら何でも噛むか？」
「昨日ね、お兄ちゃん、電話を見つめてため息ついてんの。時々、

意を決したように「よしっ！」何て言いながら受話器を取り上げるんだけど、すぐまた戻したりしてね」
　左手を押さえて痛がっている匠を完全に無視して、二人の会話が進んでいく。
「あたし、すぐにピンときたんだ、これは女だなって」
「ふんふん」
「で、暫く見てたんだけど、いつまで経っても電話しようとしないんで、あたしが「いい加減にしてよ！」って言おうとしたら、電話がかかってきて…。どうやら、その相手の人からだったらしいけど」
「それって、何時頃？」
　何かを思い出すように眉間にしわを寄せて、瑞貴が口を挟む。
「…うーんと…夕飯の後だったから、九時頃、かな」
「じゃ、その電話ってあたしじゃん。何？　あたしん所電話すんのに、そんなに迷ってたわけ？　匠」
　瑞貴が匠の方を呆れたような表情で見た。
「何？　瑞貴さんだったの？」
　キョトンとした表情で千夏が聞き返す。
「うん。残念ね、千夏ちゃん。そのネタ、どうやら色っぽい話じゃなさそうよ」
　そう言いながら、ケタケタと何の屈託もなく笑う瑞貴。「やめろ」といっていたはずが、いつの間にか話に聞き入ってしまっていた匠は、がっくりと気が抜ける思いだった。
「なあんだ、つまんない。ま、お兄ちゃんじゃ瑞貴さんはもったいないもんね」
　そう言ってから、喋ったので喉が渇いたのか、千夏は残っていたビールを一気に飲み干す。そして、軽く缶を振って空になったのを確かめると、それを匠の方に投げた。
「おかわり！　あたしは、怒ってんだから！　博文のばっかやろーっ！！」
　完全に酔っているのか、そう言いながら千夏はじたばたと手足を

暴れさせる。
「お、お前…」
「まあまあ、千夏ちゃん」
匠が何か言い出すよりも早く、瑞貴が千夏をなだめた。
「その、博文君だっけ？　彼は、きっと千夏ちゃんのこと大切に思ってるんじゃないかな」
「ほえ？」
千夏がとろんとした目を瑞貴の方に向ける。
「だって、そうでしょ？　よくいるじゃない、「据え膳食わぬは男の恥」っていうのをモットーにしているようなタイプって」
「チャンスがあればっていう人？」
「そう」
聞き返す千夏に、瑞貴が答える。匠はそれを聞きながら弘樹のにやけた顔を思い浮かべていた。
「でも、彼はそんだけ千夏ちゃんがチャンス作っても、手、出さないんでしょ？　それは千夏ちゃんのこと大切に思ってるからだよ、きっと」
「…本当？」
とろんとしたすがるような目で、千夏が聞き返す。
「うん。きっと」
にっこりと微笑みながら瑞貴が答えた。
「…そう…かぁ…ふふっ…いやだなぁ…博文ったら…」
瑞貴の答えに納得したのか、暫く千夏は一人幸せそうに笑っていたが、やがて俯いたままおとなしくなる。
「おい、千夏？」
「しっ！　寝てるみたい」
どうしたのかと千夏の肩を叩こうとした匠を、瑞貴が止めた。
二人は暫くそのまま、千夏を寝かしておくことにした。
「…やれやれ、いい気なもんだぜ、全く」
そう言いながら匠は千夏の隣に座った。

「…手、大丈夫？」
歯形の付いた左手を見たのか、瑞貴が気遣わしげに声をかけてくる。
「ああ。…まだ跡が残ってるけど」
不意に、瑞貴がクスリと笑った。
「何だよ」
聞き返す匠に、瑞貴は黙って千夏を指差す。
いつの間にか、千夏はちゃっかり匠に寄りかかっていた。
「…さんざん人のこと蹴ったりしたくせに…」
複雑な心境で、匠が呟く。
「やっぱり、何のかんのといってもお兄ちゃんのとこに行くのね」
瑞貴が微笑む。
「あの…」
そこへ、浴衣を着たちょっと小柄の男の子が声をかけてきた。ちょうど、年の頃は中学生ぐらいだろうか。
「…博文、くん？」
匠が何か言うより先に、瑞貴がそう声をかける。
「はい。あの…」
博文はそう答えながらちらちらと気遣わしげに眠っている千夏を見る。
「…大丈夫。この人は千夏ちゃんのお兄さんだから」
「そう、ですか…。あの…千夏ちゃん…いえ、藤代さんに、謝っておいて…くれませんか？」
言いづらそうにしながら、博文は匠に言う。
「何か謝るような事したのか？」
少し語気を荒げ、匠が聞き返す。
「いえ、あの…」
「大丈夫。博文君、何も謝るようなことはしてないでしょ？」
しどろもどろになってしまう博文に、瑞貴が助け船を出す。
「は、はい…そう、だとおもいます…」

少し自信なさげに、博文が答えた。
「いいわ。後は心配しなくて。それより、博文君こそ早く帰ったほうがいいわよ」
そう瑞貴に促(うなが)され、博文は何度も頭を下げながら帰っていった。
(色々言っても、匠もやっぱり兄貴ね、千夏ちゃんの事になるとムキになってる…)
瑞貴がまたクスリと笑った。
「こ、今度は何だよ」
「…何でも。…さて、あたしたちも帰ろっか」
そう言いながら瑞貴が立ち上がる。
「…そうだな」
匠はそう答え、側で眠っている千夏を見つめた。

千夏（後書き）

次で終わりです。

それぞれのはやさで

眠ってしまったまま全然起きる気配のない千夏は、仕方なく匠がおぶって帰ることになった。
「…しっかしいい度胸してるよな、おぶっても目を覚まさないなんて…」
匠がぶつぶつと呟く。
「それだけ信頼してるんでしょ、兄貴の事を」
瑞貴が笑いながらそう言って匠の腕をぽんと叩いた。
「どうだか。…でも、助かったよ、上手くまとめてくれて。俺一人じゃどうにもならなかった」
そう言ってから、匠はちょっと考えるように口ごもり、それからまた続ける。
「…でもさ、さっきの博文って奴…」
「単に意気地がないだけに思える？」
匠が言おうとしていた先を、瑞貴が先に言った。
「…ああ」
「…そうかもね。でも、そう言ったら収まんなかったでしょ？」
「…そうだな」
瑞貴の答えに、匠はふっと笑った。
「ま、どちらにせよ、取り敢えず手を出さなかった相手に感謝、だな。まだ中学生なんだから」
匠は歩きながら後ろを振り返り、千夏の寝顔を見る。少し、色っぽくなったかな、と匠は思った。
子供だ子供だと思っていたのに、いつの間にか大人になりつつあるのだ。おぶっている背中に、柔らかい膨らみも感じられる。
「…な、何だよ」
振り返って千夏を見つめていた匠を、瑞貴が見ていたのだ。ほんのちょっと、やましいことを考えてしまっていた匠は、見透かされ

たかと焦った。
「べぇつぅにぃー」
笑いながら、瑞貴はそうとぼけた。
（…さっきの博文って子、匠に少し似てる、なんて言ったら怒りそうだものね）
「あ、何だよ、その言い方」
匠がしつこく食い下がる。
「ちょっとね。それだけ突っ走れる千夏ちゃんが、少しうらやましいかなって」
瑞貴はそう答えた。
「…そうかねぇ。ただ、周りに流されただけじゃねぇ？　こうするのが、普通だっていうやつに、さ」
そう言いながら匠は、それが自分の事でもあることに気が付き、ふっと自嘲気味に笑っぅ。
（…人のことは言えないか）
気が付くと瑞貴がちょっと驚いたような表情でこちらを見ていたが、やがてそれが微笑みに変わる。
「何だよ」
「ん？　いや、やっぱ匠だなって思ったの」
「？」
キョトンとする匠。
「…何でも。…そうね、恋をする早さって人それぞれだと思うけど、やっぱ、ちょっと先走りしすぎ、かな」
瑞貴は千夏の背中を見つめながら、呟くように言った。
「人それぞれ、ねぇ」
「あ、今、馬鹿にしたでしょ」
複雑な表情で瑞貴の言葉を繰り返した匠に、瑞貴が詰め寄る。
「え？　いや、べぇつぅにぃー」
さっきの仕返しとばかり、匠はいかにも意味ありげにとぼけてみせる。

「なによー。言わないと、学校で、「無理矢理キスされた」って言いふらすぞ」
「な、何でたらめ言ってんだよ！」
「嘘じゃないもん。間接キスしたじゃない？さっき。意識してなかったとは言わせないわよぉ。一瞬、飲み口を見てから飲んだの、知ってるんだから」
「あ、あれは…」
ばれていたのか、という驚きで、後は何も言えなくなってしまう。
「どーしよう。私、もうお嫁にいけないわーって、泣いてやるから」
「わ、分かったって」
その場で立ち止まって顔に両手を当て、泣き真似をする瑞貴に負け、匠は言うことにした。
「…瑞貴は、お前はどんな早さなのかなって…そう思ったんだよ」
恥ずかしかったので俯いて言った匠が瑞貴の顔を見ると、瑞貴は暫くきょとんとした顔で匠を見ていたが、それから吹き出した。
「な、何だよ！　何も笑うこと…」
お腹を抱えて笑え瑞貴を、ばつの悪い思いで見つめる匠。
「あ、ご、ごめーん…だ、だってさ…ふふ…しょ、少女趣味だなって…」
「さ、最初に言ったのは瑞貴だろ…」
少し怒った匠は、千夏をおぶったまますたすたと先に歩き出す。
「あ、わ、悪かったって…ふふ…ば…ね、ねえ！」
必死に笑いをこらえようとしながら、瑞貴は匠を追いかける。
だが、その笑いは暫く収まりそうにもなかった。

終

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3137h/

三/年/目

2010年10月8日15時37分発行